

高齢者施設における音環境について
サウンドスケープの観点から

東 真梨子、井 上 美智子

A Survey of the Auditory Environment of a Care Home
for Elderly People

From the Viewpoint of Soundscape

Mariko AZUMA and Michiko INOUE

近畿福祉大学紀要 第7巻 第1号
(平成18年6月)

高齢者施設における音環境について
サウンドスケープの観点から東 真梨子¹⁾、井 上 美智子²⁾A Survey of the Auditory Environment of a Care Home for Elderly People
From the Viewpoint of SoundscapeMariko AZUMA¹⁾ and Michiko INOUE²⁾

The concept of soundscape was proposed by Murray Schafer in 1977. In the domains of environmental education and architectural design, this concept is recognized as a significant tool to evaluate the quality of the environment. From the viewpoint of soundscape, this study analyzed the auditory environment of a care home for elderly people and compared it to that of an elderly person's private home. In the care home, natural sound factors (ex. bird songs) were less counted, and artificial and forced sound factors (ex. noises made by careworkers, BGM) were more counted than the home. Replaying CDs that included sounds recorded in natural environments seemed to draw responses from the elderly people at the care home. The natural sounds reminded them of the time they had spent in their own homes and gardens. All the residents of the care home fondly remembered their past lives spent at their homes, and one of them even wrote a Haiku (Japanese poetry). Based on these results, we proposed that the residential environment of care homes should be improved from the viewpoint of soundscape as well in order to promote quality life.

Keywords: care home, environment, natural sound, soundscape
高齢者施設、環境、自然音、サウンドスケープ

1. はじめに

日本の高齢化率は年々高まり、2004年には65歳以上の高齢者の割合が人口の19.5%を占めた。また、要介護認定を受けた高齢者数は394万人で高齢者人口の16.0%を占める。そのうちで施設介護サービスの受給者数は77万人と数字的には小さくなるが、それでも多くの高齢者が施設に入所していることは現実である。今

後、高齢化が進行すると、その実数は増加すると考えられている。高齢者が入所する施設では、なるべく自宅で暮らすような生活に近づける努力がなされているものの、様々な点で理想に近づけないことはよく指摘される。自宅で暮らすような生活に近づけるためには、職員の介護技術や心理的な援助技術の向上は欠かせないが、施設環境も重要である。近年導入が進むユニットケアや個室化などの取り組みは、そうした環境面が

受付 平成18年4月21日, 受理 平成18年5月11日

1) 社会福祉法人 サンシャイン会 (介護福祉学科2期卒業生)

〒761-4302 香川県小豆郡池田町蒲生東脇350

2) 近畿福祉大学 〒679-2217 兵庫県神崎郡福崎町高岡1966-5

らの改善を目指した取り組みだともいえる。

ところで、現代の生活は豊かで人工的な物に囲まれ、自然を意識せずとも生活することができる。1995年5月5日付の朝日新聞に“今の子どもたちは豊かさの代償に自然のにおいや音などさまざまなものを失いつつある”という記事が掲載されたが、これはどの年代にも共通して言えることではないだろうか。この記事では記憶としての感覚について述べられており、人によってにおいや音の記憶はいろいろあるだろうとする。音については、近年サウンドスケープという概念が環境教育や住環境整備の観点から評価されている。鳥越(1997)によれば、サウンドスケープとはもともとはSchaférが提唱した概念で、“個人、あるいは特定の社会がどのように知覚し、理解しているかに強調点のおかれた音の環境”¹⁾として、1977年に定義されたものである。これは直訳すれば聴覚的景観を意味し、同じく鳥越(1997)は“視覚の影にあって日常では無意識化しがちな私たちの環境への「聴覚的思考」を喚起するための考え方でもあり、同時に「聴覚」を切り口としながらも最終的には私たちの五感、全身の感覚を通じて「環境」をとらえようとする考え方”²⁾だとする。この説明に従えば、サウンドスケープとは人間を取り巻くすべての音を含むものである。しかしながら、サウンドスケープの視点から快適な住環境について住民に対するアンケート調査をした金ら(1992)³⁾は、サウンドスケープのなかの自然要素の重要性を報告している。また、上述の鳥越(1997)⁴⁾もサウンドスケープ・デザインの要素として自然の音をあげている。岩宮(2000)⁵⁾も都市公園のサウンドスケープ・デザインでは“自然が感じられる音”が好ましい音とされていることや、1年を通して好まれる音は水の流れる音や鳥の音が上がることを報告している。すなわち、サウンドスケープにおいて自然は重要な要素としてとらえられているのである。現在の生活は人間が本来もっている五感を喪失させているのかもしれないが、高齢者は成長過程では子どもの頃からあたりまえに自然と関わっていたはずである。ところが、高齢者施設では危険防止を目的として居住空間が閉めきられていることが多く、在宅の生活より自然を感じる事が少ないことが予想される。自宅であれば少なからず自然に触れることができ、それだけでよい心理的・生理的効果を知らず知らずのうちに得ており、また、それを媒介として人生を振り返ってみたり、エピソードを思い出したりする機会につながっているのではないかと思われる。

そこで、本研究においては、サウンドスケープの観

点から高齢者福祉施設の音環境の実態を明らかにし、在宅における音環境との違いを比較する。さらに、自然の音を聞くことが利用者に何らかの効果をもたらすのかどうかを明らかにし、在宅生活に近い施設のあり方を自然との共生という観点から検討する。

2. 方 法

(1) 調査対象

D特別養護老人ホーム

D施設は、兵庫県中播磨地域の山に近い田園地区にある。入所者数50名、職員数(嘱託職員も含む)30名である。犬を飼い、施設の敷地内には植物も数多く植えられ、地域環境も施設内環境も比較的自然而豊かである。施設は山際にあるため、建物の裏は山である。したがって、施設までの道路はほとんど施設関係者と周辺住民しか利用しない。田園地帯にあるため、近隣の道路も交通量は少なく、静かな環境である。施設内の床材は一般的なビニール樹脂製のもので、特に防音効果が施されているわけではないが、フローリングやコンクリート床に比較すると音が発生しにくい素材であると考えられる。居室のドアは横にスライドさせるタイプのもので、居室での録音時には原則的にドアは閉められていた。ただし、居室Aについては4人部屋であるため、出入り回数が多く、ドアが開いていた時間帯が他の居室よりも長かった。ドアの開閉音はほとんどない。今回の調査対象とした場所と利用者は、図1及び表1の通りである。

在 宅

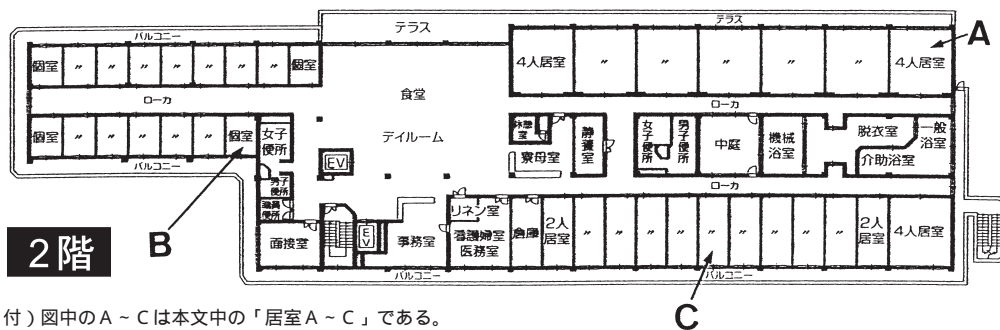
香川県小豆郡で暮らす独居高齢者の自宅。山に近い自然の豊かなところにあり、地域環境としてはD施設と似ている。対象者は女性で82歳。自立。介護保険非該当であるが、やや難聴がみられる。生活の中では常に窓を開け放している。

(2) 調査方法

音環境の録音・分析

施設については、中央のデイルーム、居室A～Cの計4箇所です9:30～10:30、13:30～14:30の間にMDレコーダーを設置し、録音者がその場を離れた状態での音環境を録音した。在宅についても、同じ時間に居間にMDレコーダーを設置し、録音した。実施したのは、施設が2004年8月1～15日の間の8日間、在宅は同年8月7、8日の2日間であった。なお、事前の7月に5日間、利用者さんや施設の状況を理解し、把握するためにボランティアとして訪問した。

録音データをCDプレイヤー(SHARP MD-F250)にてボリューム30に設定し、聞こえた音を1分ごとに



付) 図中のA～Cは本文中の「居室A～C」である。

図1 D特別養護老人ホーム2Fの間取り

表1 対象場所と利用者

[a] 対象場所

名称	
デイルーム	居室ではなく、TVがあり、利用者が集まることのできる場所
居室 A	すぐ裏が山で窓からはコンクリートの壁のみが見える居室
居室 B	デイルームに近い西側の居室
居室 C	東側中央部付近の緑が見える居室

[b] 利用者

名称	性別	年齢	居室	状態
F	女性	92	A	話し好きの方である。認知症はあるがコミュニケーションは可能、ADLにおいて問題はない。やや難聴である。
G	女性	91	A	マイペースで穏やかな方である。山に近いところで生活してこられ、畑仕事にも詳しい。軽度の認知症症状はみられるがADLはほぼ自立。聴覚は良好。
E	男性	77	B	若いころから病気をしておられ、10年位前に別の病気により寝たきりとなられた。認知症症状は特に認められず、コミュニケーションは可能。聴覚良好。何にでも意欲的な方である。
H	女性	88	C	日中ベッドで過ごされており移動は車椅子。比較的重度の認知症症状がみられ、よく歌の歌詞を口ずさんでおられる。多少の難聴がみられる。
I	女性	72	C	日中ベッドで過ごされており移動は車椅子。認知症はなく聴覚も良好であるが、発語がやや聞き取りにくい。コミュニケーションは可能。
J	女性	88		重度の認知症症状がみられるがADLは自立。聴覚良好。自宅におられた頃は多くの田んぼを作っておられたという。
K	女性	89		車椅子でデイルームに出てこられ、日中デイルームで過ごされることが多い。テーブルの前では、できる範囲で他の人の援助をされている。認知症症状は認められる。やや難聴。

書き出した。1分間に同じ音が2回以上あった場合にも1つとしてカウントし、それを自然の音、人工の音、利用者さんの声(話し声、せき、歌等)、TVの音、BGMの音、職員さんの声の6種類に分類した。ガンガン、ドンドンなど発生源が限定できない音については人工の音とした。在宅における対象者及び他の人の声は、利用者という分類に入れた。

自然の音の再生と記録

施設のデイルーム及び居室A～Cにおいて、上述の同じ時間帯に自然の音(鳥の声、川のせせらぎ等)の入ったCDを、各場所2～3回ずつ約50分程度流しておく(ボリュームは各居室25、デイルームにおいては30に設定)。その間やその直後に、対象者から自然に出た発言をノートに記録した。実施したのは、2004年8

月1～15日の間の8日間であった。

3. 結 果

(1) 施設と在宅のサウンドスケープ

録音した音を、自然の音、人工の音、TVの音、BGM、職員さんの声、利用者さんの声の6種類に分類し、その具体的な内容を表2に示した。施設において種類が最も多かったのは、人工の音で「コールの音」や「足音」を中心に12種類も聞き取れた。在宅でも種類が最も多かったのは人工の音であったが、4種類だけであった。在宅ではBGMはかけておらず、当然ながら職員の声はなかった。サウンドスケープを形成する音の種類数だけで比較しても、施設は在宅に比べて多くの音を有していることがわかった。

図2は、場所ごとに以上の6分類の音がどの程度発生しているかをみたもので、全録音分数のうち何分にその音がカウントできたかを%で示している。まず、デイルームでは午前午後とも全録音時間の80%を超えてTVの音が流れ、同時にBGMも全録音時間中の40%の間流れていた。そして、人が集まる場であるだけに利用者さんの声も多かった。その上に、多種多様な人工の音も加わり、かなり騒々しいサウンドスケープであるといえる。自然の音は午後にはわずかにカウントされたが、発生源は施設で飼っている犬の声だった。

次に、居室であるが、発生した音のカウント数はデイルームに比べると少なく、より静かな音環境であるといえる。しかし、どの居室においても人工の音が占

める割合が多かった。特に、居室Cでは全録音時間の80%に人工の音がカウントされていた。居室ではTVの音やBGMは自分で選択できるので、居室によっても午前・午後でも違いが出た。前の廊下にベンチがあって居室内外の利用者の方がそこに座って話をされる事が多く、また、4人部屋でもある居室Aでは利用者の声は他の居室に比べ、特に午前中に多かった。自然の音については、居室によってわずかに違いはあるものの全体としてはカウント割合は少なく、居室Cで20%ほどカウントされていたのが最も多かった。これは、セミの声であったが窓を閉めていたことから明確な音としては録音されていない。

一方、在宅では最も多かったのが録音時間中つけっぱなしであったTVの音である。次に多かったのが自然の音であり、3種類の鳥の声とセミの声が含まれていた。BGMや職員の声はなく、近所の方との会話の声が利用者の声としてカウントされている。人工の音は、カウント割合も少なかった。在宅のサウンドスケープは、施設に比べて人工の音が少なく、自然の音の種類もカウント数も多いといえた。また、施設では他の利用者や職員の声があり、BGMなどの自分が選択できない音もある。これも、在宅のサウンドスケープとの違いである。

(2) 施設利用者の自然の音に対する反応

施設利用者の自然の音に対する反応を、対象者7名のそれぞれの方について「聞いていただいた回数(午前、午後1回とする)」、「再生後の利用者の発言」、「表

表2 録音した音の種類

種別	自然の音	人工の音	TVの音	BGM	職員の声	利用者の声
施設	鳥の声 セミの声 犬の鼻息	コール 水道 カーテンを引く音 足音 台車が走る音 袋がかさかさいう音 椅子を引く音 掃除機の音 クーラーの音 バイクの音 金属音 食器の音	高校野球 時代劇 歌番組 ニュース バラエティー	ピアノの音楽 軽快な音 のんびりした音 オルゴールのような音	会話 笑い声	会話 怒る声 咳払い くしゃみ 叫ぶ声 笑い声 指示する声
在宅	鳥の声 セミの声	足音 水道の音 食器の音 マッサージ機の音	高校野球			会話 咳払い 笑い声

情」を示した(表3)。

まず、発言内容であるが、「鳥の声」「虫の声」など自然の音から、自然に関わる昔の生活や自宅での生活のことを思い出されて、話をされた(E、F、G、I、J、K氏)。また、ウグイスやモズなど鳴いている鳥の名前を正しく言っておられた(E、G、I、J氏)。表情は「穏やか」(E、G氏)であったり、「生き生き」(J氏)とされたり、「懐かしそう」(K氏)にされたりし、どの方も自然の音を心地よいものとしてとらえておられるようにみえた。

なかでも、日頃から積極的な方であるE氏は今回の実験にも強い興味を示された。発言の量も多く、自然

の音から過去の記憶を呼び起こして懐かしみ、俳句も作られた。「次はいつもってきてくれるん?」とも発言された。また、比較的重度の認知症であるH氏は実験前の会話の中で「ウグイスの季節はいつですか?...春ですか、夏ですか、秋ですか?」と問いかけをしたところ、「いや~、いつやるか。夏か?いや秋やな」と確信を持った様子は見受けられなかった。しかし、ウグイスの声を再生するとそれを耳にしたとたん「もう上手になっしょってやから春やいうてももう夏が近いな。」と発言された(ウグイスは春先には下手な鳴き方であり、だんだん上手に鳴けるようになる)。

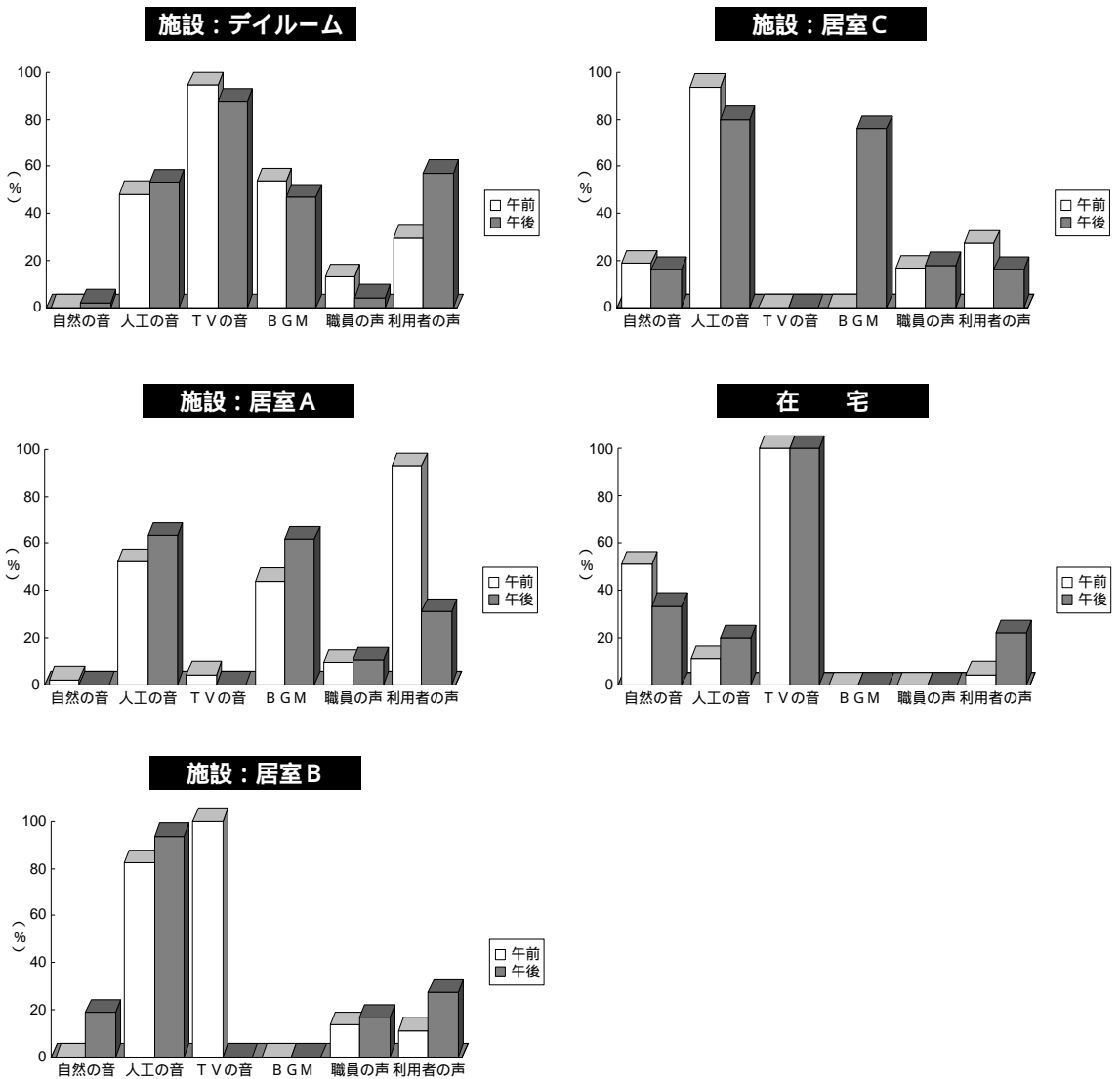


図2 施設と在宅環境で録音できた音の種類

表3 施設利用者の自然の音への反応

対象者	実施回数	言 葉	表 情	備 考
E氏	3回	<ul style="list-style-type: none"> ・ 普段の生活ではすずめは飛んでくるがこんなに声はしない。 ・ 家には柿やざくろやピウやいちじくの木があります。 ・ 波の音聞いとったら(どこかの)家を思い出す。 ・ もずの声はケーケーケーいいよみたいです。 ・ この中で一番えんはこおろぎの声、次は鳥の声、その次は波の音ほんで雷。 ・ ぼーっとしながらきいとったら気分がいい。 ・ 家でモズの声聞いて、隣の猫もピウの木によってきよった。 ・ 家ではなすびやきゅうりを育てている。 ・ 俳句がはずむ。(その場で五つの俳句をつくってくれる。) 	<p>初回は多少の動揺が見られた。10分くらい経過すると外を眺めたりされながら穏やかな表情が見られる。2回目、3回目においては、私がレコーダーをもって入るなり、喜んで下さり、再生始めから穏やかな表情が見受けられた。</p>	<p>やや難聴であることもありレコーダーを目の前におき、意識して聞いていただいた。(10分程度ずつ)</p>
F氏	2回	<ul style="list-style-type: none"> ・ うちのだんなは、ようできた人やった。もうだんなは死んだけど、その子供がまたようできるんや。こんなきれいな鳥の声やったら息子にもきかせてやらなあかん。今度、あんたも一緒に(聞きに)いかんかな。 ・ 眠とうなってきたわ。 	<p>再生中はレコーダーのことをあまり気にしておられない様子だった。</p>	
G氏	2回	<ul style="list-style-type: none"> ・ ウグイスの鳴き声は「「ホンドン(自分の家の先祖の仏さん)かけたか」いよるように聞こえるって昔にいよったもんや。 ・ ウグイスの鳴き声に反応して窓を見ておられる。 ・ 世の中まっとうに生きたらおかげがめぐってくる。悪いこと考えるよりありがとううとったほうがいいことがあるんで。 ・ ええ声や。ウグイスは好き。鳥もこっちになんかゆうてきよってんや。(鳥の声を聞く)と)心まできれいになったように思う。 	<p>ウグイスの声に表情が和らいでおられた。ウグイスの姿を探しておられるような動作もみられた。</p>	<p>ダイルूमで再生中にウグイスの声を聞いてされた発言。</p>
H氏	2回	<ul style="list-style-type: none"> ・ あら。上手に鳴きよってや。もう春も終わり。おまえ、よう鳴いたなあゆうてやらな。 	<p>私の質問に対する勘違いをH氏自ら気づき最終冗談交じりに笑顔が見られる。</p>	<p>「今は春ですか？夏ですか？秋ですか？ウグイスが鳴く季節ですよ。」 「いや～秋か？もう秋やな。ふるさとを思い起こして夢二つ…」という会話の後、実際にウグイスの鳴き声をきいていた。</p>
I氏	1回	<ul style="list-style-type: none"> ・ (居室に入るなり)ウグイスなきよったで～！ええ声やった。 ・ 家の近くには田んぼや畑がたくさんある。山の近く。(自宅の周囲の話をも10分ほどして下さる) 	<p>再生後、話したくて仕方がないといった様子で、一生懸命わたしに話してくださいました。笑顔が見られる。</p>	
J氏	2回	<ul style="list-style-type: none"> ・ いや、ちょっと！鳥の音がするわー。私の家の近くでもこんな声しよってや。ほんまここはええとこや。ちょっと聞こえてくるだけで気分がええわ。 ・ かえるが鳴いたら雨が降るゆうて昔からいいよったんや。 ・ うぐいすか？今度はもずや。 	<p>びっくりされたような、そして何かを発見したような生き生きとした表情をされていた。</p>	<p>ダイルूमで再生中にされた発言。</p>
K氏	2回	<ul style="list-style-type: none"> ・ (鳥の声を聞いて)あれっ、これは何の鳴き声？ ・ 昔はようヒル(田んぼにいる虫)に食われたもんや。田んぼに塩もっていきよった。かまれたら、大きに腫れ上がるからなあ。(ヒルは塩に弱いから) 	<p>同じテーブルにおられる方に話しておられる表情には懐かしさがあふれ出ていた。</p>	<p>ダイルूमで再生中にされた発言。</p>

4. 考 察

以上から、まず、施設では 自然の音が少ない、コミュニケーションに関わる音が多い、BGM、TV、職員の音など他者に合わせた生活音が多い、同じ施設内でも場所によって異なること、在宅では 自然の音は種類も量も多い、人工の音は少なく居住者の選択による、全体として音の種類も量も少ないということがわかった。人工音にしても在宅では主体的に選んだ音や自らが出す生活音が中心になるが、施設の場合は居室全体に共通してみられる音、職員が出す音など他者が出す、あるいは、他者に合わせた生活によって発生する音が中心である。つまり、施設と在宅とは、サウンドスケープはかなり異なるといえよう。それには、建物のサイズや鉄筋、木造などといった構造の違いもあるかもしれない。また、サウンドスケープは同じ施設であっても居室の向きや施設周囲の環境によって変化すると考えられた。例えば、居室Aはダイルームから一番遠く、居室Bはすぐ隣に位置する。居室Bではサウンドスケープの中にぎやかなダイルームの音も含まれていた。また、4人部屋の居室Aは、1人部屋の居室Bよりも利用者さんの声が多く、コミュニケーションの機会の差があるようだ。自然の音についても、居室Cでは、窓から木がたくさん見え、そこに集まってくる鳥の音が聞こえた。しかし、居室Aは窓から見える風景は山を切り開いたあとのコンクリートの壁であり、居室Bでは住宅などであった。自然の音が最も多かったのは居室Cであり、窓の外の環境が影響していると考えられた。

在宅のサウンドスケープは施設に比べて人工的な音や強制的な音が少ない。これも都市部の市街地と山間部では異なるサウンドスケープになるだろうが、在宅生活のほうが自然の音を耳にする機会が多いことは確かであろう。その内容も、在宅では豊かである可能性がある。また、人工音についても、同じTVの音といっても、自分が選んでつけたTVの音とダイルームのTVの音では記録されたサウンドスケープの要素として表面上同じであっても聞き手にとっては意味が違うであろう。前者は選んだ音であり、後者は強制される音である。一方で、在宅では独居の場合、人の声の割合はどうしても低くなる。今回の調査ではたまたま近所の方との会話があったが、なければ人の声はサウンドスケープの要素としてあがってこなかったことになる。

自然の音を聞いて施設利用者は、昔や家での生活や自然と関わる経験を思い出したり、懐かしんだりし、自然に関わる事実を正しく認識できた。この結果から、サ

ウンドスケープのなかの自然の音の存在に意味があることがうかがえる。自然の音を刺激として、気分がよくなったり、話が弾んだりすれば、わずかであってもQOLの向上につながり、また、H氏のように見当識の復元にも効果があるようである。すなわち、コミュニケーションの中だけでは理解が困難でも、こうした機会があれば認知度は増すということであろう。また、G氏とK氏の発言からは、その方々の生活歴が読み取れたが、記憶に残る自然の音から関連した要素を認識するきっかけになったと考えられた。今の高齢者は私たちの世代より多く自然と関わってきたため自分の音風景の中に自然の要素をたくさん持っていると考えられる。そのためわずかでも音を聞いただけで、自分の音風景を浮かび上がらせることができたのかも、現在の若い世代が高齢者になったときには実現しがたいことかもしれない。音を聞くことによって昔を回想された方が多かったが、自分の記憶や想像による映像を浮かび上がらせているわけで、音体験として再現されるものといってもよいだろう。つまり、サウンドスケープは単に現時点での音の風景であるだけでなく、垂直的に記憶の中の風景につながるものとしてもとらえられるのではないだろうか。私たちは同じ音や同じ風景を見ても、その感じ方は過去の記憶によって左右され、十人十色の感じ方がある。それと同じように、同じ音を提供しても、利用者個人は自分のサウンドスケープを拾い上げ、作り出す。それを材料としてコミュニケーションをとるきっかけにもなる。つまり、コミュニケーションの素材としても、自然の音は生活の良循環を生み出すきっかけになりえるだろう。

Ulrich (1983)⁶⁾は、外科手術後の回復に入院している居室の窓の外に自然が見える景観であった場合、見えない景観の居室よりも回復度に効果があったと報告した。また、森林浴の効果を幅広い観点から研究している宮崎(2004)⁷⁾によれば、自然由来の音を録音したCDによる実験でも、生体が鎮静化すること、すなわち、リラクセス効果があるという。こうした自然環境に関わる要素が人間の心理や生理によい影響をもたらすことは環境心理学分野では事実として認められている。園芸療法や動物介在療法はそうした事実に基づいて実践されている療法であり、最近では園芸福祉として広義の意味での福祉に役立つ活動ととらえられるようになってきている。サウンドスケープにおける自然の要素も、受動的なものではあるが、自然要素と関わるのと同様の効果をもたらすのではないだろうか。

児玉ら(1987)⁸⁾によればアメリカでは早い時期から老人居住施設の環境条件を測定・評価する尺度が開

発され、そこでは社会福祉学領域だけではなく、老年社会学や環境心理学からも提案がなされているという。児玉らは、それらを参考に日本における環境評価尺度の開発を試み、具体的には、建物の快適性、社交・レクリエーション設備の充実度、身体機能低下への配慮などについて、尺度を設定している。すなわち、施設の物的環境の評価のあり方を提案したのである。しかし、それらの尺度の中に自然環境要素やサウンドスケープの概念は見られない。また、高齢者の居住環境が検討される場合、在宅であろうと施設であろうと、いかに要介護状態になっても生活しやすいか、介護者が介護しやすいか、生活が便利かという視点での提案が中心である。なるべく在宅に近い施設環境が求められている今、施設における集団生活のいいところを生かしながら、在宅のような精神的安堵感を求める場合に自然との関わりは不可欠であろう。施設周囲における視覚からのランドスケープ（景観）を変えることは難しいが、サウンドスケープは簡単に変化をつけられる。このような視点から今後の施設サービスの中では、利用者それぞれがサウンドスケープの中から個人の景観を作り出せるような音環境の整備が求められる。ここで重要なのは個人のサウンドスケープという観点である。例えば、今回の結果でも人の話し声は施設に比べ在宅は少ないという結果ではあったが、それだからといって施設がよいとは判断できない。いつもにぎやかであることを望む人ばかりではなく、生活の場である以上その人の望むようなサウンドスケープがあることが望ましいのである。BGMや近くの共有空間からの音などは、いわば個人からすれば強制される音であり、個人のサウンドスケープの観点からはマイナス面をもつだろう。このような点は特に、集団生活が前提である施設で配慮すべき点であろう。

施設環境の中で、個人のサウンドスケープを創出する、あるいは、上記のような効果をもたらす自然の音を取り入れる環境を創り出すには、施設におけるハード面の工夫とソフト面の改善が考えられる。まずハード面の工夫として、施設周りの環境に目を向けることを提案する。施設周りに、花を植えたり木を植えたり自然を増やすことで生き物がやってくる。ベランダに鳥の好む実をつける植栽をおいたり、セミの好む木を庭に植えるなどもよいだろう。すると、施設の中においても、五感を使ってそれらすべてを感じることができ、人に与える効果も考えられる。BGMだけに頼らず、季節や時間によっては窓を開けたり近くを散歩できるよう工夫することもよいだろう。次にソフト面であるが、人工の音を極力減らすことがよいとは限らず、心地よ

い音はそれぞれに違うため、困難な課題である。しかし、そこで生活する人のことを考えた音環境を作ることにはできる。受け手の気持ちを考えて介護に反映するのと同じように、そこが生活の場である以上、音環境も考えていくべきではないだろうか。山岸(1999)は“私たちに生きる勇気や希望を与えてくれる音風景があること、さまざまな音風景の中でも遊びの中で体験した音風景は特別に心に残る”⁹⁾、“音楽は人間にとって、心身の支えであり、私たちにはずむ心を与えてくれている。そうした音楽の芽生えと萌芽はさまざまな自然の音や身の音に見出される”¹⁰⁾、“音の風景とは、世界と人間、音世界と人間との相互の出会いの中でたち現れるものであり、音と人々との交わりの中に時代様相をみることが出来る”¹¹⁾、“そして音によって、音を通して私たちはともに生きている人々の存在を知る”¹²⁾とした。また、山田(2000)も“声や音を聞くことは、たんに聴覚的な経験ではなく、身体的な経験だといえる”¹³⁾とする。これらの言説からは、音とのかかわりは、人間にとって聴覚刺激に留まらないものがあることが読み取れる。人間の生活にとって「音」も必要不可欠な要素であり、施設においては介護に従事するものが、それをどう認めていくのかが重要ではないだろうか。高齢者の施設ケアにおいては身体的なケアとともに精神的なケアにも重点がおかれるべきだとされるが、よりよい音環境を考えることは、精神的なケアにつながりうる。本稿では、似たような環境にある施設と在宅を一つずつしか対象としなかったが、調査対象を広げれば、様々なサウンドスケープを持つ施設や在宅環境に出会えるはずである。今後は、様々な施設をサウンドスケープの観点からみながら、自然を重視した豊かな施設環境のあり方について考えていきたい。

謝 辞

快く研究に協力してくださいましたD施設の生活相談員の伊東氏、介護主任の松本氏を始めとする職員のみなさま、利用者のみなさま、施設を紹介して下さった近畿福祉大学の井土先生、その他ご指導いただいた先生方に厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 鳥越けい子：マリー・シェーファーと20世紀音楽の地平。『サウンドスケープ』、60、鹿島出版会、東京、1997
- 2) 鳥越けい子：サウンドスケープ思想に基づくデザイン活動。『サウンドスケープ』、158、鹿島出版会、

東京、1997

- 3) 金柄哲、藤本一尋、中村洋：サウンドスケープの視点からみた住宅地の居住環境整備に関する調査研究．九州大学工学集報、65 - 6、581 - 589、1992
- 4) 鳥越けい子：サウンドスケープ思想に基づくデザイン活動．『サウンドスケープ』、173 - 172、鹿島出版会、東京、1997
- 5) 岩宮眞一郎：都市公園で聞く音．『音の生態学』、45 - 55、コロナ社、東京、2000
- 6) Ulrich, S. R. : View Through a Window May Influence Recovery From Surgery. Science, 224, 420 - 421, 1983
- 7) 宮崎良文：実験データにみる自然と人の関係．『森林浴はなぜ体にいいか』、77 - 81、文藝春秋、東京、

2004

- 8) 児玉昌久・児玉桂子：居住環境評価尺度作成の試み．群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編、36、315 - 331、1987
- 9) 山岸美穂・山岸健：感性和拡張された身体．『音の風景とは何か』、日本放送出版協会、東京、38、1999
- 10) 山岸美穂・山岸健：感性和拡張された身体．『音の風景とは何か』、日本放送出版協会、東京、57、1999
- 11) 山岸美穂・山岸健：サウンドスケープの社会誌．『音の風景とは何か』、日本放送出版協会、東京、121、1999
- 12) 山岸美穂・山岸健：サウンドスケープの社会誌．『音の風景とは何か』、日本放送出版協会、東京、141、1999
- 13) 山田陽一：自然の音・文化の音．山田陽一、『自然の音・文化の音』、20、昭和堂、京都、2000